

日本一のジーンズ生産工場を目指して。

横山 巧

工場長 / 生産管理

大学で法律を学んだ横山さんが選んだ就職先は、アパレル業界。「教員や銀行員になる流れに反発したじゃないですけど、スーツを着る仕事がなんとなく嫌で(笑)。当時好きだったミュージシャンの影響で古着が好きだったこともありますね。」ジーンズメーカーや婦人服小売などの会社で、営業、バイヤー、生産管理と経験を重ねて、10年前に現在の会社に入社したそうです。

入社当初から、自社ブランド「YANUK」の生産管理に携わり、工場長となって3年目。転機となったのは、3年前に本社が行っている経営学の研修に参加したこと。月に1回、1年以上かけて行われる研修で、「参加した当初、今後やるべき方向性も見えず霧の中にいたような状態のときに、本社の貝畑会長が工場に来られて色々アドバイスをくれることがあって。そこで『グループ会社の、アメリカでジーンズNo.1と言われている工場を直接見て来い。』と。実際、アメリカの工場に行くと、設備から人事評価制度まであらゆる方策を連動させながら目標実現に取り組み成功している仕組みを目の当たりにして、「これだ!」と。そこから自分の意識も変わって、目指すべき方向性も見えてきました。」

自社の最大の特徴は、ジーンズの一貫工場であることと話す横山さん。「全体の生産計画の精度を上げないと業務のつながりが悪くなります。部門ごとに業務を行う他社のように熟練技術を強みとしてものづくりを行う会社も素晴らしいですが、自分たちは、マンパワーや継承の問題に左右されることなく、仕組みとして例えばAI化と手作業を上手く融合させるなど、全体のレベルの底上げをすることで差別化を行っています。今後も、様々なアプローチから日本でのジーンズNo.1生産工場を目指し、「YANUK」という世界で戦えるブランドを作り続けていきたいです。」



もっと生の声

Q & A

- 思い出に残っていることはありますか。
日本で生産するとコストダウンできないという業界の常識に真正面から挑んで、日本製3,900円のジーンズを作ることにしました。コストダウンを実現するため、2インチ自動裁断機、ポケットセッターなど自動機設備を導入し、設備を活かすために営業部門と仕様の調整を行ったり、導入費に国や県の補助金を活用したり、様々なアプローチを行って、完璧に利益が出るころまでは到達していませんが、なんとか回せる状態までにはなったことです。
- 今後、取り組んでみたい、実現したいことはありますか。
さらなる工場の自動化やデジタル化の推進ですね。あわせて、工場働く人たちのモチベーションの維持も重要だと考えていて、自分が苦手な部分でもあるので、現在は国のハンズオン支援の制度を使って専門家にサポートしてもらっています。そういったマネジメントの取り組みを通して、ISO9001の取得も目指しています。
- 将来繊維業界に従事する人へのメッセージをください。
繊維産業だけでなく製造業は厳しい状況が続いていますが、そういう時に、できない理由を外に求めて、厳しいと言っているだけでは何も変わりません。そうではなくて、自分がやるんだという強い意志が、どんな仕事でも大事だと思っています。自分たち次第でやれることは無限にあります。悲観することなく、ともに頑張ってください。

